私の東京物語

3 全10話

田中（たなか）　康夫（やすお）

耳学問の人生

「あずかり保育」という用語すら存在しなかった五十年余り前、通園していた谷戸幼稚園で週一回、放課後に開催のお絵描き教室。ある日、夕食の時間帯になっても戻って来なくて心配した母親が迎えに来ると、僕だけが居残っていました。

「絵の才能は無いけど、高学年の児童とも話題を合わせるんだから、大したもんだ」。指導していた年配の画家が皮肉交じりに母親に伝えた内容は、幼心に僕も鮮明に覚えています。描くよりも話をするのに忙しく、幼稚園児と入れ替わりにやって来た小学生全員が描き終えても、一人で画用紙に向かっていたのです。

少しだけさかのぼって僕が三歳になる前の冬、母親が教諭を務めていた小学校の保護者が家に来て、コタツに入っていた僕は「おとなしい坊ちゃんですね」と褒められます。こそばゆく感じて、「猫かぶってるんです」と答えたら、ビックリされてしまいました。恐らくは前日の夕食時、共通の知人に関して両親が、「あの人は猫をかぶっているのよね」と話していたので、意味は分からないけど、こういう具合に使うんだと思って、口にしてみたのですね。

両親や祖母が読み聞かせしてくれた福音館書店の絵本「こどものとも」を合冊してもらって育った僕は、その一方では〈耳学問〉の人生でもありました。座学で覚える「形式知の知性」だけでなく、五官で育む「暗黙知の勘性」が大切だと僕が述べ続けてきた原点。なあんて、自慢にもならぬ逸話ですが（苦笑）。

（作家）

1960年３月、３歳のころ